

[2]

氏 名 (本籍)	阿部美香 (愛知県)		
学 位	博士 (学術)		
学位記号番号	博乙第21号		
学位授与年月日	平成12年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
論 文 題 目	中世寺社縁起の研究— 二所三島の縁起世界を中心に		
論文審査委員	(主査)	教授 後藤 淑	
		教授 本田 俊和	
		教授 櫻井 清彦	
	早稲田大学	教授 小林 保治	

論 文 要 旨

本研究の目的は、中世の寺社縁起を通して、文化の諸相を考究することを目的とする。ここに研究の対象として、二所三島の縁起を取り上げるのは、次の理由からである。

伊豆、箱根、三島の霊地は、鎌倉幕府の宗教政策のもとで政治的にも宗教的にも文化的にも重要な地として、東国の一大宗教圏を創り出している。したがって、そうした時代を背景に編纂される縁起には、東国の王権の誕生とそれをめぐる二所三島の霊地の確立、及び顕密仏教における神仏にたいする解釈学に則った文化活動が刻み込まれていると考えられる。また、二所三島のそれぞれの霊地は個々に独立しながらも、参詣儀礼を通して「二所三島」という一つの宗教世界を創り出している。したがって、二所三島の縁起は、個々に考察できるばかりでなく、二所三島という世界を通して様々な角度から立体的に縁起の機能や構造をとらえることができると考える。

二所三島の縁起を対象とした研究は、個々の縁起においてはいくつもある。しかし、その構造や価値を明確にして研究したものはほとんどない。さらには、個々の縁起世界から「二所三島」という縁起世界を考究する試みは、未だなされていない。

そこで、本研究は、伊豆、箱根、三島のそれぞれ縁起世界を明らかにし、その構造を探究した上で、「二所三島」という一大宗教空間における縁起世界や参詣儀礼の世界を考えようという新たな観念から取り組むことにより、中世の寺社縁起が有する文化や機能、価値を見出そうとするものである。

研究の方法は、それぞれの寺社縁起や参詣次第の試料を収集してテキストを作り、資料の解釈から、縁起資料の機能や価値を見出すことを通して、中世の基本的概念を考究する。そして、二所三島の縁起世界をより立体的にとらえるために、二所三島の信仰を背景に生まれた『曾我物語』の世界を通して、中世の文化を総合的に考えることを試みた。

その結果、第一章では、『箱根山縁起并序』の内容構造とその成立の時期から、寺社縁

起が単なる自己宣伝の所産ではなく、宗教的、政治的背景を背負って成立していることを指摘した。さらに、『箱根権現縁起絵巻』の存在から、本地垂迹の神仏が本地物語として語られる構造を見た。そこには、様々な法華経信仰に基づく思想や儀礼が反映されているとともに、本地物語において神仏が人間として体験する恩愛別離を通して、天地の恩、父母の恩、帝王の恩などいわゆる「四恩」の調和がおのずと語られていることを予見した。

第二章では、走湯山の縁起を通して、『縁起』と『秘訣』が一具となって初めて、密教的な仏教世界と神道的な世界を一つの走湯山信仰の世界として表すものであることを、その縁起の構造から指摘した。さらに縁起成立の背景に、当時の伊勢天照大神をめぐる修験を含む顕密僧たちの神学的学問があることを確認した。

第三章では、三島大明神の縁起である『三宅記』が、本地物語の構造をもつ公式的縁起であることを指摘し、物語世界において、四恩が基本的な概念として大切であったことを見出した。

第四章では、『佛神一体灌頂鈔』の構造を通して、「佛神一体」という、本地垂迹説でも神仏習合説でもない新たな縁起世界の宗教概念が、東国で箱根を中心に生まれていたことを指摘した。それは、位相の異なる二所三島の縁起世界が「二所三島」という宗教世界を確立させる方法の一つであった。

その上で、第五章では、二所三島の縁起世界を通して『曾我物語』の物語世界を考察した。その結果、『曾我物語』の全体構造として、四恩の調和と孝養の徳が二所三島参詣の儀礼を通して語られていることが新たに見出された。『曾我物語』の主題は、曾我兄弟の怨念と鎮魂の物語ではなく、「報恩謝徳」のための孝養の物語と言い得る。曾我兄弟による「報恩謝徳」の合戦は父への孝養のみならず、王としての頼朝の恩徳を喚び覚ますための闘いでもあったことが明らかになった。それは頼朝という王を支える二所三島の宗教世界が、常に王権の安泰のために四恩の調和を説き、王権に対して警告を発し続けた物語であったとも言い得る。

本研究においては、それぞれの縁起の資料的価値とその機能を解明する基本的な作業を通して、中世の新たな宗教思想上の概念と世界構造の発見に努めた。二所三島の縁起は、東国の王と神仏の関係を、神学的学問を背景に追究する上で成立していた。このことは、中世の寺社縁起を国家規模で見たとき、鎮護国家を支える宗教界の自意識が個々の縁起を生み出している可能性を指摘する。二所三島の縁起は、中世の寺社縁起に対する既成概念を根底から問い直す必要性を認識させるものであった。

審査報告要旨

本論文は二所（箱根権現、伊豆山権現）三島明神の縁起研究を通して、中世寺社縁起のもつ、縁起の本義及びその社会的、宗教的存在意義を考えようとしたものである。五章にかけて論じている。

中世寺社縁起の研究は近年かなりの進展が見られる。そうした研究の中にあつて、本論

文には、注目すべき発想と発言がある。中世寺社縁起研究に新しい示唆を与えるものであり、学位の称号の与えるに十分な価値をもつものと判断され、審査員四名の一致によって認証されたものである。

一章から五章にわたって論じているその要点は次の如きものである。

第一にあげられる注目すべき点は、研究の基本となる二所三島明神縁起の伝本をくまなく収集しており、そこには新しい資料の発見もあって、研究に新鮮さを与えていることである。これら資料に正確な翻刻、訓読、校訂を加え、それに詳細な考注を加えている。基本資料の収集、校訂に長い時間をかけているだけに、信憑度の高いものとなっている。付録として付けられている資料集は新発掘のものを加え、資料集そのものにも論文に匹敵する価値をもっている。

第二は、今までの二所三島明神縁起の研究が個々の縁起の研究に流れていたこともあって、内容を荒唐無稽なものとしてとらえ、評価が低い傾向にあったのに対し、本論文は各縁起を総合的にとらえ新しい見解を述べている。即ち、この縁起が鎌倉幕府の宗教政策と結びついていることを論じていることである。この立論が単なる推論でなく、縁起の構造分析から論じており信頼度が高い。今までの中世寺社縁起の研究に新しい示唆を与えている。

第三は、二所三島の縁起世界が、密教的仏教世界と天照大神を中心とした伊勢神道的世界との一体という宗教世界が根底にあると指摘している点である。これは、今まであまり注目されていなかったことであつた。また、この宗教世界を民衆に流布する時、法華経を信ずる聖、行者が介在し、二所三島参詣という形をとったと資料をもって証明している。これは、中世の語り物文芸、芸能と縁起との関係を示唆しており、この問題は今まで空白部分が多いだけに注目される。

第四は、三島明神縁起の一つである『三宅記』をとりあげ、この縁起が本地物語の構造をもつ公的縁起であることを指摘していることである。これは今まであまり注意されていないだけに注目される。

第五は、真名本『曾我物語』をとりあげ、『曾我物語』の本地物語的構造が、二所三島明神縁起の儀礼的世界の構造と似ていることから『曾我物語』が二所三島明神縁起と深い関係にあつたと指摘している。そして『曾我物語』が曾我兄弟の怨念とその御霊鎮魂の物語であるとする今までの説に別の考えを提示しており注目される。怨念、鎮魂より父に対する孝養の考えが根底にあつたのではないかと注目すべき発言をしている。この立論が推論でなく、二所三島明神縁起の構造的な分析と内容検討から論じているだけに注目される。

以上が本論文の要点である。以上のことから、本論文は中世寺社縁起研究に新しい光を提示するものであり、学位に値する論文と認めるものである。